■ピアノ・ソナタについて

過去を振り返らず、常に歩みを止めることがなかったベートーヴェン。ひとつとして同じタイプの作品がなく、いつも新しいことを求め、創造する苦労は惜しみませんでした。

初期（～1801）のピアノ・ソナタは先輩作曲家であったハイドン、モーツァルトの古典的なスタイルを引き継いでいましたが、交響曲のように規模が大きく演奏も難しく、エネルギー溢れるものとなっており、当時はピアノの名手として活躍していたベートーヴェンでしたが、すでに個性が滲み出ています。新進の作曲家として注目を集めることとなったソナタ「悲愴」は、厳かに始まる前代未聞のスタイルで書かれ、人々はそれに驚きました。その後は楽章の構成を変えたり、即興的な要素や楽章の切れ目を無くすなど次々に新しい試みを取り入れます。そして、これも当時としてはありえない第１楽章が遅いテンポで始まるソナタ「月光」が生まれたのです。この頃から耳の変調を感じ始めました。

中期（1802～1809）になると、「普通の作風ではなく革命的な作品を」と依頼を受けましたが、ベートーヴェンは拒否。しかし、その依頼の影響があったのでしょう。シェークスピアの劇的な物語を作品に盛り込んだソナタ「テンペスト」など、色々な模索をしながら次々とソナタを書いています。また、この時期の楽器の進化もベートーヴェンの創作力をかきたてました。初期に使用していたピアノの鍵盤は６１鍵でしたが、ベートーヴェンはフランスのエラ―ル社の性能が良くなった６８鍵のピアノを贈られたことにより、その性能を最大限に生かしたソナタ「ワルトシュタイン」を作曲しました。そして、楽器の進歩とベートーヴェンの作曲創造が見事に合わさった頂点とも言える傑作ソナタ「熱情」の誕生へとつながります。
しかし、この「熱情」の後、美しい小品的なソナタを書くものの、規模の大きなソナタは書くまで長い空白ができました。ちなみに、この空白はベートーヴェンの創作力が衰えたのではなく、健康問題や社会状況の変化が影響したようです。

後期（1816～1822）になると、更に聴覚障害がひどくなりましたが、しばらくの空白期間が新たな創作力を温存したのでしょう。過去の偉大な作曲家バッハやヘンデルらの作品に関心が向けられ、研究をし、さらに７３鍵の最新ピアノを贈られたことにより新たな大作ソナタ「ハンマークラヴィア」が生み出されました。そして、いよいよ最後となる３つのソナタでも新たな試みを取り入れ、円熟した作曲技法に高い精神性が加わった、誰にも真似のする事ができない独創的な作品を書き上げたのでした。
ベートーヴェンは人間の感情をただ音楽にしたのではなく、緻密な考えの下で建築物のようにきちんと理論を組み立てて作曲をし、常に葛藤や悲劇から喜びや勝利へと転じる音楽を書いたのです。